

VI 成果と問題点

1 土器集中1の土器の特徴

(1) 内在的属性について

胎土 在地土器(全個体の98.1%)は、石英・長石・角閃石を含む胎土を母材とし、風化の著しい泥岩粒・軽石・土器片・纖維(獸毛の可能性がある)を混和材とする。混和材は、「やや粗:中粒以上の泥岩・軽石を含む」が全個体の59%で多用される。土器片混和がみられる個体は全個体の61%で、そのうち56%が「少量: 3 mm四方の細かい土器片を少量」であり、深鉢・台付浅鉢・壺にはやや高率に現れる。纖維の痕跡は全個体の11%で、深鉢・鉢・舟形鉢にはやや高率に現れる。搬入土器(全個体の1.9%)は、石英・長石・角閃石を少量含む胎土を母材とし、明灰白色・礫～粗粒軽石を非常に多く含む。

成形 成形は全て粘土紐輪積みである。接合面の加工については、加工のないのが大多数(観察個体の91%)あるので、加工が接合面の接着強化を意図としていない。縄文を施す例は全て接合面に沿う横位回転であるが、器面施文が斜位縦走である個体にも横位の例があるので、器面施文とは別の意図があったと考えられる。また、縄文を施す接合面の出現位置には規則性がないので、器面装飾・接着の強化以外の意図があり、それは製作の際に不定期に施していると推定できる。

口縁～胴部の成形 深鉢・浅鉢・鉢・台付鉢は外傾(80%後半)・内傾(10%後半)・外傾+内傾(5%前後)と同じ傾向である。倒円錐台形の器形を持つこれらは、器高の差・台部の有無に関わらず外傾接合が優勢である。そして、同一器種における個体の形態差と接合面の傾斜選択に有意がないので、接合面の傾斜は細部成形を統御しない。外傾+内傾の深鉢・浅鉢は大多数の外傾の中に1箇所ほどの内傾があるので、なるべく单一の接合面で成形をしようとした意図がうかがえる。舟形鉢は内傾(60%)が優勢な理由は倒円錐台形の器形ではないからか。

壺は倒円錐台形の器形にくらべて外傾(70%)がやや少なく、外傾+内傾(26%)がやや多い。外傾+内傾のうち、5例が下半内傾・上半外傾で、2例が逆である。壺の成形は上半部が窄まるところから下半内傾・上半外傾が本来的である。よって、一貫して外傾、下半外傾・上半内傾は、特異な成形といえる。下半内傾・上半外傾は倒円錐台形の器形における優勢な外傾接合から派生した成形であろう。ただし、壺の形態差と接合面の傾斜選択に有意がないので、接合面は細部成形を統御しない。

底部・底面の成形 半球または丸底皿状底面を成形の始発とし、その後、丸底を内底面側に押し込み凸平底に変形する。そのため、接合面は一見すると内傾に見えるが、本来は外傾接合の繰り返しである。

形態の歪み「軸対称」 V章-3 設定目的a(歪みなし:正立して成形、不定方向の歪み:傾斜させてその角度を一定に保たない成形、一定方向の歪み:傾斜が一定状態・横倒の成形)とV章-3 設定目的c(近い位置:軸はほぼ一定、ばらつきがあり:複数軸)について。

「非対称」は全個体の26%、「対称」は全個体の74%で、深鉢・鉢に器壁の非対称例が頻出する。「不定方向の歪み」は深鉢・鉢について顕著である。「歪みなし」は浅鉢に顕著である。「中心位置・離心率」より、深鉢大・中・小、浅鉢大・小は成形時には回転軸が不定であり、器壁の積み上げ開始と中盤の軸ぶれが中盤と終盤に比べると大きい。ただし、深鉢は器形が小さくなるに従って中心位置のちらばり・離心率の数値が小さくなり、鉢小の中心位置のちらばり・離心率の数値も小さい。浅鉢中・袖珍は成形時には回転軸が不定であり、器壁の積み上げ中盤と終盤の軸ぶれが開始と中盤に比べると大きい。

以上より、深鉢・鉢は傾斜させてその角度を一定に保たない成形を行い、浅鉢は正立して成形を行っていたことが推定できる。また、深鉢・浅鉢は成形時の軸が不定であり、深鉢は器形が大きいほど一定

の回転軸の維持が困難である。

形態の歪み「口縁と底面の非平行」 V章-3 設定目的 d (喫水面と底面のなす角度なし:設置時の安定・最大容積の確保を考慮、喫水面と底面のなす角度あり:設置時の安定・最大容積の確保を考慮せず)について。

「非平行」は全個体の40%、「平行」は全個体の43%で、深鉢・鉢・台付浅鉢に非平行例が頻出する。「角度あり」は深鉢・鉢・浅鉢全てに顕著である。以上より、深鉢・鉢浅鉢・台付浅鉢は丸底を平底にする際に設置時の安定・最大容積の確保を考慮しなかったと推定できる。また、器形が大きいか極端に小さい場合(深鉢大・中、浅鉢大・中・袖珍)は、底面傾斜方向は胴部の(水平方向における)歪み方向と一致せず、器形が小さい場合(深鉢小・鉢小・浅鉢小)は一致する。両者間における有意差の原因は不明である。

形態の歪み「器面平坦」「非正円」 V章-3 設定目的 b (一定の曲線:成形以外の外力が加わらない、曲率が変化し直線が生じた:一部に成形以外の外力が加わる)について。

「平坦面のあり」は全個体の66%、「平坦面なし」は全個体の44%。深鉢には平坦面が多く、口縁部に頻出する。浅鉢には平坦面が少なく、特定部位に頻出しない。また、最大/最小径比においては深鉢の42%が「非正円」である。深鉢大・中は、口縁部において顕著に平坦面が生じている。深鉢小・鉢小・浅鉢大・中・袖珍は、口縁部における平坦面は見当たらない。以上より、大型で器高の高い器形には外力が口縁部に偏って加わっていることを示す。

器壁の角度・形状 V章-3 設定目的 e (器壁立ち上がり角度・断面形状の類似:器種固有の器壁積み上げ方針がない、器壁立ち上がり角度・断面形状が類似しない:器種固有の方針がある)について。

70度前半の角度:深鉢大・中・小と鉢小、70度後半の角度:深鉢中・小。50度前半の角度:浅鉢大・中・小。50度後半~60度前半の角度:浅鉢中・小・袖珍。50度以下の角度:浅鉢袖珍。以上より、器種固有の器壁積み上げ角度があるが、一方で同一器種内の中型以下のものに2つの角度があることから、器高・口径が小さい場合は立ち上がり角度が厳密に求められることを示す。なお、彎曲する器壁・直線的器壁と角度には相関はないようだ。

鈴木 信・西脇対名夫「北海道縄文晚期後葉の土器製作技法について」(『立命館大学考古学論集』2003年)において、外傾接合・半乾燥(製作の中断)、歪み・器面に一部平坦面が生じる理由として横倒しのまま成形した可能性を指摘した。

外傾・内傾の違いと形態差とに有意がないので、接合面の傾斜選択が半乾燥のみを理由に選択されたわけではない。また、歪み・器面に一部平坦面が生じることは、横倒しのまま(=傾斜が一定状態)の成形ではなく、成形時の軸が不定で傾斜させて、その角度を一定に保たない成形を行い、その後一時的に横倒しをしたことを示す。

おそらくは斜めに(視線と器面がほぼ一直線に重なるくらいの)しながら不定軸の回転で粘土紐を積んだと考えられ、この場合は外傾接合のほうが粘土紐は積みやすい。製作時には丸底で、事後的に作出された底面の径が7.0~8.5cmという小ささがこの成形を示している。一部平坦面が大型深鉢に多い理由は底面周縁部のつまみ出しを行う際に横倒しを余儀なくされたことによる。いっぽう、本来上記のような形態には外傾が最適な接合面であるにもかかわらず、内傾が少数在る理由は、内傾に積み上げる方針をとっても結果的に外傾で積み上げた器形に似せるという制約があったと考えられる。

半乾燥=製作の中断は、接合面の加工の出現位置が不定であることから多種の器形を併行して製作した結果であるとも考える。これは、V章-2の見解でも述べたが、1個体において粘土成分が異なる場合がある。器種固有に最適な性質を持つ粘土を使用する前提において、複数の粘土が混じるということは、多種の器形を併行して製作していたことを示す。なお、口縁と底面の非平行は上記の成形に

由来することもあるが、製作時に設置時の安定・最大容積の確保を考慮しない理由は使用時に調整可能であるからではないか。つまり、土器を置いたのではなく、埋けた可能性があるからである(後述)。

倒円錐台形の器形の器種には、固有の器壁積み上げ角度があり、一方で器高・口径が小さい場合は角度が厳密に求められない。計測は行っていないが、器高33%未満の底部には33~67%の胴部のように角度の多様性(=器種の固有性)はなく、「角度がある:深鉢・鉢・浅鉢」、「角度がゆるい:浅鉢」に収斂する。口縁部における角度は外傾と直上・内彎曲と内屈に3大別されることもあわせると、成形第一段階(器高33%未満の底部);2通りの角度、成形第二段階(器高33~67%の胴部・体部);5通りの角度と器高調節、成形第三段階(器高68%の口縁部);3通りの角度がある。2通り×5通り×3通り=30通りと器高調節の方針がある。なお壺については倒円錐台形と円錐台形の成形複合であり、成形段階の境が器高の50%と頸部にある。以上に、口唇部の加飾・注口の接続・台部の接続が加わる。

成形はきわめて単純な方針で始発し、次の段階で細部の器形を意識し、最後に前段の制約を受けて限定的な方針に帰着する。

調整 内面は外面よりも強いナデで、ナデ幅が明瞭に観察できる硬質原体によるナデもある。壺・注口の内面調整は鉢類に較べて粗い調整である。

使用方法1(外面被熱による変色) 赤橙色:表面劣化が著しい、全個体の55%。黄白色:表面劣化があまりみられない、全個体の43%である。

深鉢大(器高36cm・口径33cm以上、容積13.5リットル以上)は黄白色26%(7/27例)・赤橙色74%(20/27例)、深鉢中(器高36cm未満~23cm・口径33cm未満~23.5cm、容積4.0リットル以上)は黄白色19%(17/88例)・赤橙色81%(71/88例)、深鉢小(器高23cm未満~18cm・口径23.5cm未満~18cm、容積1.5リットル以上)は黄白色45%(14/31例)・赤橙色55%(17/31例)、深鉢袖珍(器高・口径18cm未満、容積1.5リットル未満)は黄白色40%(4/10例)・赤橙色60%(6/10例)であり、深鉢は規格が小さい小・袖珍では赤橙色の出現率が低い。

浅鉢大(器高15cm・口径30cm以上)は黄白色40%(4/10例)・赤橙色70%(7/10例)、浅鉢中(器高15cm未満~10.5cm・口径30cm未満~18.7cm)は黄白色55%(30/55例)・赤橙色42%(23/55例)、浅鉢小(器高10.5cm未満~6.5cm・口径18.7cm未満~15cm)は黄白色70%(19/27例)・赤橙色30%(8/27例)、浅鉢袖珍(器高6.5cm未満・口径15cm未満)は黄白色69%(9/13例)・赤橙色15%(2/13例)であり、浅鉢大を除いて黄白色の出現率が高い。

浅鉢大と鉢の赤橙色63%(5/8例)は深鉢大の赤橙色の出現率に近い。台付浅鉢の赤橙色20%(2/10例)、舟形鉢の赤橙色29%(2/7例)、壺の赤橙色29%(10/34例)であり、浅鉢中~小の変色に似る。深鉢・浅鉢大・鉢とそれ以外の器種では被熱に強・弱の差(使用法の差)がある。

また、赤橙色化が器面全周に及ぶ場合と、一部の面に偏る場合がある。深鉢大は全周100%(20/20例)、深鉢中は全周94%(66/70例)・一部6%(4/70例)、深鉢小は全周76%(13/17例)・一部24%(4/17例)、深鉢袖珍は全周50%(3/6例)・一部50%(3/6例)であり、深鉢は規格が小さいほど偏った赤橙色化を生じている。

浅鉢大は一部100%(7/7例)、浅鉢中は全周30%(7/23例)・一部70%(16/23例)、浅鉢小は一部100%(8/8例)、浅鉢袖珍は一部100%(2/2例)であり、浅鉢は一部に偏って被熱される場合がほとんどである。後述する土器埋け跡のある焼土において炉の中心と周縁に置かれた場合があることから、赤橙色化が器面全面に及ぶ場合は炉の中心に置いて使用し、一部の面に偏る場合は炉の周縁を囲繞するように置いた、と推定される。

器面全周に及ぶ場合の個体における赤橙色化の範囲は器高で表現すると、深鉢大が底面から器高48%(平均値、以下同じ)、深鉢中が底面から器高53%、深鉢小が底面から器高64%、深鉢袖珍が底面

1 土器集中 1 の土器の特徴

から器高70%であり、器高が減じると赤橙色化は伸張する。よって、炉の中心に置いて使用された場合、規格毎に火力の調節が行われていなかった可能性がある。

使用方法 2 (底部暗色帯) 底部暗色帯は直接火熱が及ばないために形成されたものである。「あり」全個体の25%で、深鉢98%、浅鉢2%にある。深鉢大には78% (21/27例)、深鉢中には59% (54/92例)、深鉢小には44% (18/41例)、深鉢袖珍には27% (3/11例)。

底部暗色帯の位置(底部下端から底部暗色帯下端までの器高方向の高さ)は、深鉢大が14mm(平均値、以下同じ)、深鉢中が1mm、深鉢小が2mm、深鉢袖珍が0mmであり、深鉢大の位置が極めて高い。また、底部暗色帯の幅は、深鉢大が26mm(平均値、以下同じ)、深鉢中が25mm、深鉢小が15mm、深鉢袖珍が19mmであり、深鉢大・中の幅が広い。

上記より、炉に土器を埋けて使用する場合が多いのは深鉢大(容積13.5リットル以上)・中(容積4.0リットル以上)であり、深鉢小(容積1.5リットル以上)・袖珍(容積1.5リットル未満)は炉に置いて使用する場合が多かったと考えられる。なお、浅鉢は「赤橙色化」が22%で「あり」が2%なので、煮沸であっても持ち運びが重視された器形である。

ところで、対雁 2 遺跡では土器埋け跡のある焼土が検出されている。昨年度報告まで地床炉41基・集石炉1基であり、全調査焼土の1%にも満たない極少ない例である。報告では焼土中の小ピットと呼称されている付属遺構で、上端径は10cm、深さ5cm位である。焼土1基に付属する小ピットの個数は、1個(55%; 23/42基)が頻出し、8個(7%)が最多個数である。焼土における小ピットの設置位置は、焼土の中心・焼土の周縁・焼土の中心+焼土の周縁がある。設置位置と設置個数の関係、設置個所が多いほど焼土の周縁に設置する例が多い。

小ピットの上端径は10cm、深さ5cm位という大きさは、底部暗色帯の位置+底部暗色帯の幅=埋設深、に相応するはずである。深鉢大は14mm+26mm=40mm、深鉢中は1mm+25mm=26mmであり埋設深と小ピットの深さはほぼ相応する。いっぽう、全調査焼土の99%に土器埋け跡がない理由は、pitがないC字状の焼土平面形、容積4.0リットル未満の埋けない土器を中心・周縁に置く、調理時間と火力(弱火で長く・強火で短く)の問題も関連する。

使用方法 3 (炭化物の付着) 外面の付着状況は、深鉢は規格に関わらず器高1/3以上(口縁と口縁・胴部)に多くに遺存している。浅鉢も同様の傾向にあるが、浅鉢中・小は器高2/3以下(体部と体部・底部)にも遺存している例がある。浅鉢中・小の付着炭化物が底部まで及んだまま遺存しているのは加熱温度が低いことを示しているのだろうか。

内面の付着状況は、深鉢大は器高2/3以下(胴部・底部と底部)に、深鉢小・袖珍は器高1/3以上(口縁と口縁・胴部)に、深鉢中・小は口縁～底部に遺存する例が多い。浅鉢大・中・小は口縁～底部に、浅鉢袖珍は器高1/3以上(口縁と口縁・胴部)に多くに遺存している。

その他器種は、外面の付着が鉢2例・台付浅鉢5例・舟形鉢3例・壺9例・注口1例あり、内面の付着が鉢5例・台付浅鉢6例・舟形鉢2例・壺4例ある。舟形鉢・壺・注口の付着率はきわめて低い。これらは別の機能が主であったにもかかわらず調理に使用されたと考えられる。器形によって厳密に規定される調理法ではなく、器形と機能の関係が緩やかな状況がうかがわれる。

内底面の付着例は多くなく、「円形:全面に付着する」8例と「環状:中央に付着しない」11例があり、浅鉢に環状が多くみられる。環状になる理由は、浅鉢を炉に設置する場合に直に底面に火熱が当たらない工夫があったと考えられる。

使用方法 4 (補修孔) 深鉢においては「あり」個体と「なし」個体数の差はほとんどないが、それ以外の器種では「なし」個体が頻出する。深鉢大は56% (15/27例)、深鉢中は71% (62/88例)、深鉢小は29%

(9/31例)、袖珍は10%(1/10例)であり、深鉢大・中に多く施される。これらは埋けて使用されることから補修の原因が使用・運搬により生じたとは考えにくい。大きい土器が丁寧に使われたことを示している。

(2) 表出的属性について

形態 深鉢は、平縁・端面内傾・器壁は外傾・凸平底が頻出し、単峰突起・端面水平・器壁は直上・平底が次ぐ。浅鉢は、平縁・端面水平▽丸い・器壁は外傾・凸平底が頻出し、単峰突起・端面水平・器壁は内彎・平底が次ぐ。鉢は、平縁・端面水平・器壁は外傾・凸平底が頻出する。台付浅鉢は、平縁・端面水平▽外傾・器壁は外傾▽内彎・揚げ底が頻出する。深鉢と鉢、浅鉢と台付浅鉢の形態が似ている。ただし、浅鉢と台付浅鉢は底部の形態が異なる。

調整 施文の際に下地を整える調整はなく、縄文の上に描かれることがほとんどで、ナデの上に施文する例は3%(12/424個体)である。

口唇部・突起の施文 深鉢・浅鉢は2段撲り縄文の回転圧痕、鉢・台付浅鉢・舟形鉢・壺・注口はナデのままが頻出する。

口縁部・胴部の施文 土器集中1には「背景文様」と「上描き文様」がなく直描き主文様のみである。主文様は、1段に展開する、横位沈線、弧沈線(交互弧沈線・並列弧沈線)、三角形沈線(交互三角形沈線・並列三角形沈線)、並列菱形または紡錘形沈線、波状沈線、工字沈線がある。また、2段に展開する「変形工字沈線(対向弧沈線・背反弧沈線・対向三角形沈線・背反三角形沈線)、横位沈線を上段か下段に配してその他主文様組み合わせる2段がある。なお、3段以上の展開はない。

主文様と器種の関係は、「横位沈線」のみは、深鉢・鉢・注口に多く、浅鉢・台付浅鉢・壺に少なく、舟形鉢にはない。「弧沈線」は、鉢・注口・舟形鉢にあり、深鉢・浅鉢・台付浅鉢・壺に少ない。弧沈線の中をナデ消している例が4例ある。「三角沈線」は、深鉢・浅鉢・台付浅鉢・壺にあり、鉢・舟形鉢・注口にない。「波状沈線」は、壺に多く、深鉢・鉢に少なく、浅鉢・台付浅鉢・舟形鉢・注口にない。「並列菱形沈線」は、鉢・注口にあり、深鉢・台付浅鉢・舟形鉢に少なく、浅鉢・壺にない。「工字沈線」は、深鉢・浅鉢・鉢・台付浅鉢・壺にあり、舟形鉢・注口にない。「変形工字沈線」は、舟形鉢に多く、深鉢・浅鉢・壺にあり、鉢・台付浅鉢・注口にない。「縄文」のみは、深鉢・浅鉢に多く、鉢・台付浅鉢・壺に少なく、舟形鉢・注口にはない。

主文様の組み合わせは、深鉢:「波状沈線」+「横位沈線」▽「並列弧沈線」▽「交互弧沈線」▽「交互三角沈線」が多く、浅鉢:「横位沈線」+「並列弧沈線」▽「並列三角沈線」▽「工字沈線」がやや多くある。舟形鉢:「横位沈線」+「並列弧沈線」やや多く、壺:「横位沈線」+「並列弧沈線」▽「交互弧沈線」、「波状沈線」▽「横位沈線」▽「並列弧沈線」▽「交互弧沈線」が多くある。

鉢:「並列弧沈線」+「交互弧沈線」▽「波状沈線」と「交互弧沈線」+「波状沈線」、台付浅鉢:「横位沈線」+「並列弧沈線」▽「交互三角沈線」▽「工字沈線」と「並列菱形沈線」+「並列弧沈線」▽「並列三角沈線」、注口:「並列弧沈線」+「並列菱形沈線」がある。

分断文様・副文様は、深鉢は「蛇行沈線」、浅鉢・鉢・台付浅鉢・舟形鉢・壺・注口は「短沈線・沈線」が多い。深鉢は「蛇行沈線」は主文の横位沈線と組み合わさる場合が多い。

胴部の縄文 胴部の縄文は全て口縁→底部・旧→新の順番で施されていた。「20条位の長い転写距離+1~1.5cmの狭い幅」は横位斜走・斜位横走に押捺される。「10~15条位のやや短い転写距離+2cm位の広い幅」は斜位縦走に押捺される。

器形との関係は、深鉢がR L斜位縦走、浅鉢・台付浅鉢・鉢・壺がR L横位斜走、舟形鉢がR L斜位縦走▽R L横位斜走が頻出する。そのほかには、胴部下半~底部にR L横走、R横位斜走、同じ撲り(R

L)で複数の原体を使う例があり、L RにRの付加条・R LにLの付加条があり、縄文のあとにナデ、「無文」と呼称したナデ調整のみの例がある。また、多条縄文は看取できたよりも多用されている可能性がある。

底面の文様 深鉢・浅鉢・台付浅鉢・壺はR L縄文が多用され、胴部の原体と同じものを用いて施文されている。鉢は弱いナデ、舟形鉢は文様▽弱いナデが多用される。

規格と施文 有文率は、深鉢大で81% (22/27例)、深鉢中で45% (41/92例)、深鉢小で10% (4/41例)、深鉢袖珍で27% (3/11例) であり、規格の大・小側で有文率が上がる。浅鉢は浅鉢大で27% (3/11例)、浅鉢中で23% (14/60例)、浅鉢小で19% (5/27例)、浅鉢袖珍で8% (1/13例) であり、浅鉢は低く、規格の減少と有文率の低下は相応する。鉢(6/8例)・台付浅鉢は(8/10例)規格に関係なく有文率が高い。

深鉢大・中は埋けて使われる、補修孔が多い=丁寧に使われることから、深鉢大・中は日常の用途とは異なる扱いの方があり、有文は深鉢大・中に多い。有文=非日常、無文=日常の違いがあるとすると、深鉢袖珍・鉢・台付浅鉢は非日常、浅鉢は日常に用いられる傾向があったと考えられる。

器種組成 深鉢:浅鉢:鉢:台付浅鉢:舟形鉢:壺:その他=32:19:1:1.5:1:5:0.5 であり、主要器種は深鉢・浅鉢である。深鉢は深鉢大:深鉢中:深鉢小:深鉢袖珍=3:8:4:1 であり、深鉢中・小が主要規格である。浅鉢は浅鉢大:浅鉢中:深鉢小:浅鉢袖珍=1:6:3:1 であり、浅鉢中・小が主要規格である。

2 編年の検討

(1) ママチ遺跡の群分類について

土器集中1出土土器の特徴は、粘土紐接合面が外傾すること、丸底を凸平底に変形させて底面を成形すること、後的に作出された底面の径が7.0~8.5cmという小ささであること、胴部装飾は2段撲りの長い原体による斜位回転縦走縄文が主体であることであり、文様・器形の特徴はタンネトウL式以降の型式未設定の晩期末葉～続縄文初頭の土器群である。『ママチ遺跡』(北埋調報9集 1983年)の分類に当てはめると、IV・V群にほぼ該当する。

道央部晩期後葉の非大洞系の土器編年については土器集中3(『対雁2遺跡(3)』北埋調報177集 2002年)において検討した。その要点は、IV群(平行沈線文を主体として蛇行沈線が加わり、舟形土器が出現する)とV群(曲線文・弧線文を主体とする)の別を認めるか否かである。設定根拠は層序関係に基づく頻出文様の違いである。別を認めない根拠も同様である。

ママチ遺跡の土器塚はI黒層下部にあるIV群主体の遺構である。土器塚上面近くではV群の土器が少量出土している。このことはIV群とV群が上下に堆積している経時的関係を示す。しかし、一括性は高いものの個体数が少ないため、文様組み合わせの漸移的変化が含まれていなかつた可能性も残される。いっぽう、横位平行沈線を主要な文様とするIII群とIV群の中間群、あるいは3類と4類(中田裕香「まとめ土器」『ママチ遺跡III』北埋調報36集 1987年)の中間形があり、蛇行状沈線を伴わないIV群とV群の中間群、あるいは4類の細分があることになる。土器集中3が包含層に較べて一括性が高いことはいうまでもないことなので、従来の分類に問題があることになる。そこで、土器集中3の分析においてはママチ遺跡の群分類を棄却し、今回もママチ遺跡の群分類を使用しない。

(2) 土器集中1の編年上の位置付け

表VI-1は有文・縄文のみの中で接合関係が上層または下層の中で接合している個体、上層と下層で接合しているが中層によって隔てられていない個体を層ごとに属性件数をまとめたものである。表VI-2はそれら個体の主文様の組み合わせ、描順規則を細別層における出土状況を表したものである。